

【レポート⑦】

杉田 光平

立教大学と東京芸術劇場の連携講座「池袋学」。二〇一六年度最終回である今回は立教大学の吉岡知哉総長、文学部の上田信教授、そして特別ゲストとして銭湯大使（社団法人日本銭湯文化協会）のコロイン・ステファニー氏をお招きし、「多文化共生の街としての池袋と、その中で立教大学の果たす役割」をテーマにお話いただきました。最初は上田教授に本テーマについてお話しいただきました。二〇一四年の日本創生会議の報告で、東京二十三区では唯一、池袋を含む豊島区が消滅可能性都市として挙げられました。池袋には多くの人が訪れ、にぎわっています。豊島区全体としては子育て世代が減少してゆくことが大きな要因であると思われます。池袋に深く根付いてきた立教大学がこの問題に対してどのよう

に進しており、二〇二四年には二千人の留学生を受け入れる目標を掲げています。その立教が築地から池袋に引っ越してきた大正から昭和の初期にかけて、多くの芸術家が集まったアトリエ村「池袋モンパルナス」では、当時、差別されていた沖縄出身の人

も受け入れていたと言われています。そのように以前から多文化共生の歴史をもつ池袋に、多くの留学生を招くことは効果的な

を整えています。大学は多文化の人間が一緒に学ぶ場であり、大学としてこれからどのように留学生を受け入れていくか、そして街と大学がどのようにつながっていくのか考えていかなければなりません。

続いて、銭湯大使のステファニーさんに日本文化ならではの銭湯の魅力や意義についてお話しいただき、池袋界隈の銭湯を紹介していただきました。

一方で、留学生を迎え入れるには、大学を含む地域が留学生にとって住みやすい、暮らしやすい場所である必要があります。池袋駅北口周辺には中華料理店が多く、西口周辺にはさまざまな国の料理店がある池袋は、留学生にとっては母国の料理が食べられる、安心できる空間のようです。特に、ハラルという、イスラム戒律に従って料理を出してくれるお店が立教大学の近くに数多くあります。また、立教大学も、学内にイスラム教徒の留学生も使える「祈りの部屋」を設置して、留学生を受け入れる体制

ステファニーさんが最初に銭湯に行ったのは、友人に誘われたことがきっかけでした。ステファニーさんの母国であるフランスには銭湯の文化は無く、最初は利用することに不安があったそうです。しかし、池袋の銭湯は立教の留学生も多く利用しており、外国人にも慣れている常連のお客さんが優しく話しかけてくれたそうです。その後、銭湯の魅力に取りつかれた彼女は、さまざまな街の銭湯を訪れ、その魅力をほかの外国人や日本人に伝える活動を行いました。その活動が評価され、二〇一五年に日本銭湯文化協会より銭湯大使に任命されま

した。

日本人は、なぜ家に風呂があるのに銭湯へ行くのか。ステファニーさんが考えた理由は、大きく三つの理由があります。

一つ目は銭湯に限ったことではありませんが、美容健康に良いことです。風邪をひきにくく、肌もきれいになります。

二つ目の魅力はコミュニティとしての役割です。常連の方がマナーを教えてくださいただでなく、いろいろな人と会話することで心をリフレッシュすることができます。

また街の中心として昔から存在している銭湯は、地域の情報ステーションとしての役割もあり、会話のなかで、その土地の正しいお店やおすすめの場所などの情報を得ることができま

す。そして三つ目の魅力はアート、芸術としての側面です。銭湯の建物は寺や神社と同じ伝統的な宮造りとなっています。都内の銭湯には、都内であるとは思えない自然を感じられる庭園があるところもあります。そして、多くの人が富士山を思い浮かべる

ペンキ絵をはじめ、アートを楽しむことができ、一軒一軒インテリアも異なるので、見比べる楽しみがあります。また、休憩スペースがギャラリーになっている銭湯など、文化的な側面もあります。

このような銭湯の良さは、日本人だと逆に気付きにくいことです。銭湯の他にも、日本人であるからこそ気付いていないものはあるでしょう。そういう意味で、異文化を取り入れることは、日本を見つめ直す良い機会になるのではないのでしょうか。

最後に、上田教授が司会となり、吉岡総長との対談が行われました。立教大学の国際化について、吉岡総長は海外から留学生を受け入れることに加えて、立教の学生が海外へ留学し、異なる文化を体験して戻って来る、この両方があって立教の国際化であるという考えを述べました。また、立教では英語に加えて第二外国語を必修で学びますが、このような多様な文化や言語に触れることができるカリキュラムを今後も整えていきたいという考えを示しました。

また、留学生受け入れに際して、池袋という街がただ大学への行き来のために通る街ではなく、どのような人になんでもらうかという問題があります。吉岡総長は、留学生同士の交流、そしてサークルや体育会を通して、日本人学生と留学生の交流を推進していくと述べました。また、食事の面においてもハラルや菜食主義者に対する配慮をしていくとともに、街との連携をとっていきたいと話されました。

街と連携がとれるのは、立教が長年池袋という街に根付いてきたからであり、今後もしやしていくことで、池袋と立教の双方がさらに発展していくことにもつながります。協力関係を発展させ、多文化を取り入れていくことに成功すれば、池袋を含む豊島区が消滅することを防ぐことになるのではないのでしょうか。

(すぎた・こうへい 文学部文学科日本文学専修二年次)